

◆「自助メーター」と「租庸調」

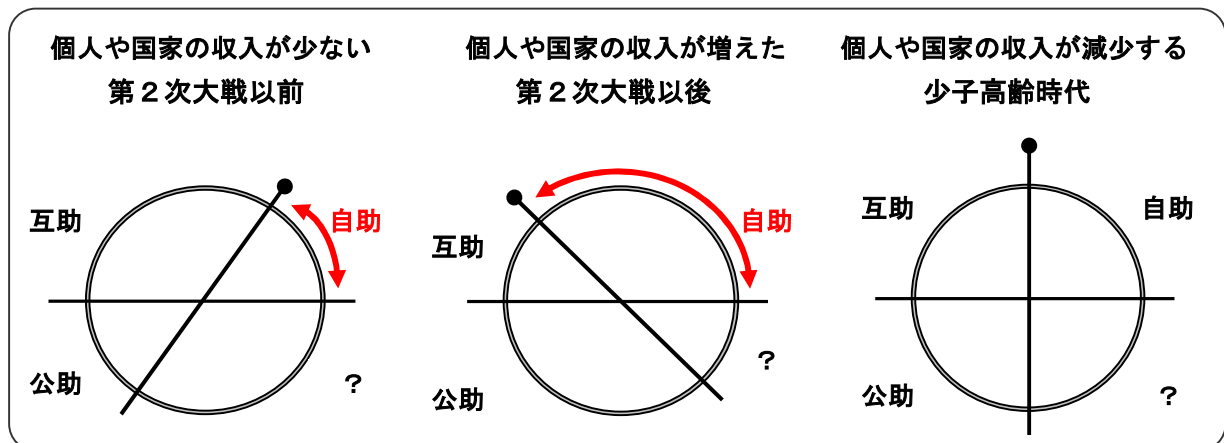
★

あるまちの「まちづくり推進条例」づくりのワークショップ（WS）を手伝っている。そのWSの市民メンバーの中に大変熱心な方がおられ、自治だとか協働について一生懸命考え、それをワープロし、メールで送ってくれる。その内容が、かなり面白いので紹介したい。

★★

まずは、下図のようなもの。私はこれを「自助メーター」と名付けた。日本人が生きていくうえで（住民が地域づくりに取り組むうえで）、「自助」「互助」「公助」「？」の4つの役割が時代によって異なることを示している。氏のオリジナルは未完成で、「？」の部分は埋めきれていない。そこで、誰でも思いつくとおり、「？」に「共助」を入れ、私なりに図解すると次のようになる。（送られてきた文書には解説はなかったが、およそ次のようなことを言いたかったのだと推測される。また、図も分かりにくいところがあったので、ちょっと手を加えた。）

個人や国家の収入が少なかった時代は、公助は薄く、しかも自力で生きていくのは厳しい。そこで、互助や共助のウエイトが大きくなる。個人や国家の収入が潤沢な時代は、自分でモノやサービスをどんどん買えたし、国も福祉や医療サービス、社会保障をガンガン膨らませた。そこでは、互助や共助は縮小する。今後、少子高齢化が一層進み、個人も国も収入が減る時代には、4つの要素のバランスをとることが大事だ。



4つの要素のうち1つのウエイトが定まると、自動的に残り3つのウエイトが決まってしまうところが面白い。自助と公助は反比例の関係だといふ思いがちだが、そうでもないと考えさせられた。この「自助メーター」、改良すれば結構使える道具になるかもしれない。

★★★

もう一つ面白かったのは、昔の税制の租庸調の話。中学の教科書で習った。「租」は税金で、昔は貨幣ではなく穀物で納めた。「庸」は労働力の提供。「調」は現物（絹や綿）納税のこと。

国の財政は借金まみれで破たん寸前。市民は「庸」としてのまちづくり活動への参加を自覚すべき。・・・氏は、どうもそのように主張したいようだ。これまた考えさせられる。氏がWSで、「行政は、市民と市の協働、協働って言うが、それは具体的にはどういうことなのか」と問う。「お互いの役割分担を明確にして、対等な立場で・・・」との行政側の回答は、かなり空しい。市民と市の協働は現実的でないと氏は言う。「公的サービスの対象にならない人を共助で支える」のは、市民と市の協働ではなく「庸」だと市民自ら言う方が、確かに大いに清々する。